



ショートコメント

★★★

Data 2024-8

香港の流れ者たち (濁水漂流/Drifting)

2021年/香港映画

配給: Cinema Drifters、大福/112分

2024 (令和6) 年1月11日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

監督・脚本: 李駿碩 (ジュン・リー)

出演: 吳鎮宇 (フランシス・
ン) / 謝君豪 (ツェー・クワンホウ) / 李麗珍 (ロレッタ・リー) / 蔡思韻 (セシリア・
チョイ) / 朱栢康 (チュー・パクホン)

👁️👁️ みどころ

2019年の逃亡犯条例の改正以降、香港では抗議デモが広がった。その姿は『理大囲城』(20年)や『少年たちの時代革命』(21年)を観ればよくわかるが、一方で香港の若手監督、李駿碩(ジュン・リー)は、2012年の「通州街(トンジャウ)ホームレス荷物強制撤去事件」をベースに、人間の尊厳を問いかける社会派ヒューマンドラマに挑戦!

しかし、中之島公園を占拠するホームレスのブルーシート(青テント)に悩まされ、それを排除する政策を断行した橋下徹元大阪市長に賛同してきた私は、本作の主人公として登場するホームレスに納得できないことばかりだ。

あくまで彼らに“寄り添う”同監督は温かい目を向けるが、そもそも「これは俺の家だ」という主張自体がナンセンス!したがって、ラストに流れる「家に帰ろう」と歌う主題歌もナンセンス!

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆本作のチラシによると、本作の謳い文句は「濁流に身を任せて生きる“流れ者”たちが欲しいのは、和解か?謝罪・尊厳かー!?実際のホームレス荷物強制撤去事件から人間の尊厳を問いかける、社会派ヒューマンドラマ。」そして、本作は「香港アカデミー賞 11部門、台湾アカデミー賞 12部門を席捲した。」そうだから、こりゃ必見!

◆一国二制度を巡って政治的に大変な状況に置かれる中、香港では近時、若手監督によって『少年たちの時代革命』(21年)、『シネマ 52』268頁)、『理大囲城』(20年)、『シネマ 52』272頁)という2つの社会問題提起作が作られてきた。

パンフレットのイントロダクションによると、「中国本土の映画市場の急成長により低迷していた香港映画界だが、2022年に“香港アイデンティティ”を色濃く描きだした新人監督たちのデビュー作が連発しヒットしたことで、地殻変動が起きた。」らしい。その結果、「いま香港で新人映画監督の登竜門として注目を集めているのが、映画制作配給会社 mm2

の新人監督企画コンペ「mm2 Emerging Directors Program」だ。」そうだ。私が見逃した『星くずの片隅で』（22年）がその第2弾作品、そして、本作がその企画の第1弾作品で、両者とも大好評だったそうだ。

香港映画といえば、一方でブルース・リーをはじめとするカンフー映画が人気だし、他方で王家衛（ウォン・カーウァイ）に代表される素晴らしい香港ニューウェーブがあるが、さて香港の近時の若手監督が演出する社会派ヒューマンドラマとは？

◆ホームレスと聞けば、私はすぐにブルーシートの“青テント”と結びつき、中之島公園や大阪城公園を彼らが占拠（？）していた社会問題のことを思い出す。そこにメスを入れ、青テントの撤去＝公園の整備を1つの政策として打ち出したのが、「大阪維新の会」を立ち上げた橋下徹元大阪市長だ。“弱者保護”を訴える多くのコメンテーターたちはそれに異を唱えたが、私は断固橋下支持を訴え続けた。その結果は現状のとおりだ。

私は知らなかったが、香港の下町・深水埗（シャムスイポー）は“貧乏人の町”として、また、ホームレスの町として有名らしい。すると、大阪で言えばさしずめ、西成地区・・・？パンフレットによると、ファインたちが暮らす、香港の下町・深水埗は次のとおり紹介されている。

九龍半島の北西部に位置する深水埗地区は、香港で最も早く開発され、最も人口密度の高い行政区となっている。香港の中でも特に所得水準の低い地区で、工業・商業施設が多い。2000年以上の歴史ある李鄭屋漢墓（古墳）と新たに開発された埋立地が混在しているのも特徴。活気に満ちたストリート・マーケットや、家電量販店、生地専門店、レストラン、屋台など下町らしい街並みが広がる一方で、路上生活者も多いことで知られている。

◆日本では、宮下公園のホームレス排除によって人権を巡る議論が巻き起こったが、香港でも2012年、15年、19年にホームレス排除による政府への賠償請求の裁判が起こされたらしい。本作は2012年に高架下のホームレスが強制退去させられた「通州街（トンジャウ）ホームレス荷物強制撤去事件」をベースに制作されたものだが、パンフレットによると、「通州街ホームレス荷物強制撤去事件」とは、次のとおりだ。

2012年、食物環境衛生署が事前通告なしに、通州街の路上生活者40名以上の所持品を廃棄した。これに対してホームレスたちが政府に対して賠償と謝罪を求め、裁判を起こした。しかし政府はホームレス1人あたり2,000香港ドルの賠償金のみで、ホームレスたちが要求していた謝罪については拒否した。

その後、2015年、2019年にも香港では同様の事件が起きている。裁判が続く中で、他界してしまった者もいた。

◆中之島公園のすぐ近くのマンションに住んでいる私は、同公園をよく散歩していたが、

そこで気に入らないのがブルーシートの青テントだった。日本では、なぜ、彼らが美しい公園内を占拠し、臭い匂いを発散させていることが許容されるの？ホームレスの人たちはかわいそうで、守られるべき存在なの？私はそんな価値観が強いが、本作に見る新人ソーシャルワーカーのホー（蔡思韵／セシリア・チョイ）のそれは、私の正反対らしい。

また、弁護士登録後 5 年間は刑事事件もやっていた私は覚醒罪事件もたくさん担当したが、その手の被疑者、被告人たちへの“共感”は全くない。もちろん、弁護士としての職責は忠実に果たしたが、彼らの中に友人になりたいと思うような人間は全然いなかった。しかして、ヤク中のホームレスである本作の主人公ファイ（吳鎮宇／フランシス・ン）や、ホームレスの中の最長老で、ベトナム難民でもあるラムじい（謝君豪／ツェー・クワンホウ）たちのキャラは？

本作を見ていると、ホーと同じように、いや、それ以上に、李駿碩（ジュン・リー）監督がホームレスたちに向ける目は優しいし、彼らに“共感”していることがよくわかる。要するに、今ドキの日本語でいう“寄り添っている”わけだ。しかし、しかし・・・。

◆本作では、失語症で、いつもハーモニカを吹いている謎めいた青年モク（柯煒林／ウィル・オー）が 1 つのストーリーの核になっている。しかし、ハーモニカを吹いているだけならいいが、彼が香水を万引きしたことをジュン・リー監督は肯定的に見ているの？さらに、そもそも、本作に登場するホームレスたちは口々に「これは俺の家だ」と主張しているが、土地の所有権や占有権をどう考えているの？道路や公園は公共物だし、高速道路の下も公共物だから、空間ではあっても勝手に家（小屋）を建てて住んでいいはずがない。そんな基本的視点で本作を見ていると、私には本作は納得できないことばかりだ。なぜ、こんな映画が“社会派ヒューマンドラマ”として多くの賞を取り、もてはやされるの？

◆チラシには、「暗くなる前に、家に帰ろう。道があるなら、家に帰りたい。」と書いてある。本作鑑賞前の私はこれが何を意味するのかわからなかったが、これは本作ラストに流れる主題歌の歌詞だ。本作のラストにふさわしい名曲かもしれないが、「家に帰ろう」「家に帰りたい」の家とは一体ナニ？

昭和 20 年 8 月 15 日の敗戦で焼け野原になった日本は、戦後復興に全力を注ぎ、家（バラック）を建て、道路を作り、街を作ってきた。また、私の若い頃は“マイホーム”を持つことがすべての若者の夢だった。しかし、土地には限りがあるし、建物を建てるにはまず土地の所有権もしくは借地権（賃借権）を入手しなければならないから、マイホームは「男子一生の夢」と言われていた。それを考えると、高速道路の下の土地を勝手に使って家（小屋）を建てて、「これは俺の家だ」と主張しても、それは土地の不法占拠で、ナンセンスな言い分であることは明らかだ。

2023（令和 5）年 1 月 15 日記